



大正っ子

帯広市立大正小学校

Obihiro Taisyō

Elementary School

<http://www.taisyō.obihirō.ed.jp>

No.45

平成28年10月11日

10月も中旬に入り、遠く日高の山々の頂もうっすらと雪化粧しています。最低気温も10℃を下回るなど秋の深まりを感じる季節となりました。季節の変わり目ということもあり、体調を崩す子どもも見られます。気温にあった服装、体温調節を心がけ、体調管理をしっかりと行いましょう。さて、今号では、過日開催されました第63回日本PTA北海道ブロック研究大会十勝・帯広大会の様子を中心にお伝えします。

『子どもは地域の宝、みんなの絆で、愛あふれる子育てを』

～ 第63回日本PTA 北海道ブロック研究大会 十勝・帯広大会に参加して ～

10月8日(土)、9日(日)の両日、第63回日本PTA 北海道ブロック研究大会 十勝・帯広大会が、市内小中学校・十勝プラザ・帯広市民文化ホール等を会場に、『子どもは地域の宝、みんなの絆で愛あふれる子育てを』～飛び出せ夢へ 生命(いのち)を育む とかちの力～をスローガンに掲げ開催されました。帯広では20年ぶりの開催で全道から約1100名の参加者が集い、交流を深める大会となりました。

8日(土)は、7分科会で家庭教育・学校支援・地域連携・防災教育など日常のPTA活動に役立つ提言をもとに積極的な意見交流が行われていました。

各分科会の概要は次の通りです。

- 第1分科会(組織・運営)『熱い想いでPTA活動』
- 第2分科会(家庭教育)『今、改めて家庭教育の重要性』
- 第3分科会(学校支援)『つなげる むすぶ ～地域・PTAの取組を子どもたちの学びへ』
- 第4分科会(地域連携)『地域総ぐるみで子育て』
- 第5分科会(食育) 『食育と生活習慣』
- 特別第1分科会(中学生討論会)『中学生サミット2016～明日(ミライ)は私たちがつくる』
- 特別第2分科会(防災教育)『地域で高める防災意識』



9日(日)は、帯広市民文化ホールで、つがる三味線・石黒会によるアトラクションに続き、記念講演として文部科学省 初等中等教育局 児童生徒課 生徒指導調査官 長田 徹氏(写真左)を講師にお迎えし、『今こそ、家庭・学校・地域の絆を深めよう!』と題したお話を聴くことができました。

長田 徹氏は、3.11の大地震に勤務地の仙台市で遭われ、直後被害が大きかった学校現場を巡り、被災校の支援に関わって来られました。そこで学校と地域の絆の大切さをつぶさに見つめ、小中学生の活躍する姿をとらえてきました。現在、文部科学省教科調査官として、その体験と専門のキャリア教育について、全国で講演活動を展開されています。

ここからは、講演の概要を紹介していきます。

震災後に避難所となった地域の学校は、避難施設としての建物の役割と、被災者の誘導・案内など運営の役割の双方が求められます。震災後、これらの役割が順調に機能した学校とそうでない学校には、ある特徴が見られたそうです。

それは普段から地域との連携が取れている学校は、避難所運営の自治化に大きな混乱がなかったということです。

また、長田さんは「地域住民がボランティアとして学校を支援するための組織づくりを行う『学校支援本部』に積極的に取り組んできた学校では、学校と地域住民との繋がりが強く、結果として避難所運営の自治化がスムーズに進むようです」と話され、日常的に学校支援に関わっていたボランティアからも「お互いの名前を呼び合える関係の中では、互いに必要とされる配慮が分かっているので、住民同士や先生とのチームが組みやすかった」という声があがったそうです。学校と地域の「顔の見える関係」によって、自然な役割分担やルール作りが進められ、それが避難所運営の「質」に影響を

裏面に続く

与えたとも話されました（*右円グラフをご覧ください）。

さらに、避難所を整理し教育活動を再開する際にも、自治組織の世話役さんの存在が大きく、「学校や行政が避難者に移動をお願いするのと、自治を担っている住民の中から『子供たちの授業が始まるから掃除しよう』という声が出てくるのでは、その後の動きが変わってくる」とも話されました。学校と避難者双方の立場が理解でき、双方に名前を呼び合える関係を持つ地域住民の調整によって、教育活動の再開がとても順調に進んだそうです。

～ 講演を聴いて ～

家庭・学校・地域が一体となった教育の大切さなど、東日本大震災の被災地での体験を踏まえての感動的なご講演を聴くことができました。

地域ぐるみでの子育てが何よりも大切とのこと。また学校と地域の「絆」づくりは、災害が発生し、混乱した状態から築くのではなく、普段から紡いできた絆こそが危機的な場面で生きること。その根底にあるのは、人間関係の構築なので、『顔の見える関係』『名前を呼び合える関係』『支え合える関係』など、日常の小さな積み重ねが大切であることを感じました。

最後に、講演の終末に紹介された

「震災時、学校を核にして、PTAと地域がチームを組み避難所の支援を行った。学校・地域の絆の大切さを実感した。子どもたちが地域の人々に感謝を伝えるため『復興より福興』とランドセルに書いて登校する姿に、生きる希望や勇気をもらった。子どもたちの喜び感動の笑顔に今日も頑張ろうとエネルギーをもらっている。子どもから学ぶことは恥ずかしいことではない」という言葉に何度も涙をこらえ、5回くらい鼻をすすって聴いていました。

～ 多くの方々のお力添えに感謝いたします ～

6月1日に開催された『日本PTA北海道ブロック研究大会十勝帯広大会決起集会』を皮切りに、PTA四役を中心に各部長をはじめ役員の方々には、実行委員として、お忙しい中、何度となく開催された会合への出席や前日・当日の準備・運営に多大なるお力添えをいただきました。また、大会当日の分科会には4名の方に参加していただきました。すべての分科会で熱心な討議や交流がなされたと聞いています。ご多用の折にもかかわらず参加をいただきました。この場をお借りして、感謝とお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

お陰様で、帯広市PTA連合会の大きな大きな活動を単Pの一つとして支えることができました。さて、今年度のPTA活動も折り返し地点を過ぎました。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

『大正小学校らしさって何だろう?!』

～ ふるさと大正の中で、大正っ子は健やかに成長していきます ～

「大正小学校はどんな学校ですか?」との問いかけにいつも答えを見つけ出そうと子どもたちに向き合っています。学校規模がごちんまりとしていることから、運動会に見られるような縦割りでの活動を随所に取り入れています。このことは、教室の配置(1年生の教室の両端は6年生教室と2年生教室です)にも表れており、上級生が常々1年生に関わっていけるような配慮や工夫をしています。

さて、教育活動に目を移して本校らしさを考えていきます。『じゃがまる農園活動』と『図書ボランティア』をはじめとする学校支援など、保護者・PTA・ボランティアの方々たが愛情と情熱をもって子どもたちを支えてくださっています。本校では、総合的な学習の時間を中心にゲストティーチャーをお招きし、子ども達に向き合っています。様々な分野で活躍されている方々から発せられるメッセージは、時として子ども達の知的好奇心を揺さぶり、瞳を輝かせ、子ども達の姿勢も知らず知らず、前へ、前へと誘います。

学校は、今後、大きく変わっていきます。それは、これまでの『開かれた学校』から、『よりよい社会をつくるという目標のもと、教育活動を介して地域社会とつながる学校』への転換です。学校はこれまで以上に、地域の人々と連携・協働して子どもの成長を支え、学校を核として地域(コミュニティ)を創るということです。

今回の第63回日本PTA北海道ブロック研究大会十勝・帯広大会に参加して、保護者のみなさんやPTAとの関わりはもとより、地域総がかりで子どもを育てていくことの大切さを改めて感じました。地域の皆様には、これまでも様々な視点で子どもたちに向き合っていたいただいています。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

Q. 避難所において自治組織が立ち上がる過程は順調だったか。(校長回答)

